KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

神田日勝記念美術館だより

「画室C」1967年

contents

2　神田日勝の色彩と造形－平成19年度常設展

3　平成19年度特別企画展「絵の具だ!バンザイ!」
　関連事業～親子ワークショップ
　「絵の具であ･そ･ぼ!」

4　神田日勝作品紹介(I)

5　神田日勝作品紹介(I)

6　第13回馬の絵作品展
　表彰式
　馬の絵写生会
　鹿追高校生がボランティア活動

7　第13回蕪墾祭
　第15回馬耕忌
　第5回日勝祭
　～「恋するトマト」上映に併せ館長が対談
　美術講座「夭折」

8　神田日勝作品紹介(II)

9　神田日勝作品紹介(II)

10　「十勝管内水彩作家展･水への誘い」
　「美の棲む処－ten展」
　「北の貌－佐藤雅英写真展」
　「信仰」と「芸術」展
　「人を描くIII」
　「野村たかあき絵本原画展」

11　感想ノートより…22
　新刊紹介
　神田日勝の「風景」札幌で展示
　平原社美術展の目録寄贈
　アート･キッズ･クラブ2007

12　夏休み子どもワークショップ
　冬休み子どもワークショップ
　春休み子どもワークショップ
　キッズ･ボランティアの活動
　芸術鑑賞バスツアー
　子ども芸術鑑賞ツアー
　柳月製菓の「Nissho」再発売
　神田日勝のコーナーも－福原記念館開館

2008.3.31

25

KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART
神田日勝記念美術館

〒081-0292
北海道河東郡鹿追町東町3丁目2
TEL(0156)66-1555
http://kandanissho.com/

神田日勝の色彩と造形―平成十九年度常設展

「神田日勝の色彩～土の色」（前期常設展）

四月二十四日～十一月四日

「ゴミ箱」1961年

「飯場の風景」1963年

「馬」1965年

神田日勝の一九五六年から六三年頃までの初期の作品は、そのほとんどが茶褐色を基調とするモノクローム（単色）の色調で描かれています。

使用していた絵の具の色は、作品から白、黒、茶色、黄土色、えび茶などが推察されます。

また、キャンバスではなく薄茶色のベニヤ板を使用しており、地の色を生かしつつ、ペインティングナイフで刻み込むように描いています。

このような茶褐色の絵の具を多用したのは経済的な理由も考えられますが、それ以上に、十勝の自然の中で農業に携わりながら絵を描いていた日勝には、大地の色としてふさわしい色合いであったこともいえるのではないでしょうか。

「ゴミ箱」（一九六一年）は、ドラム缶の上方と空き缶やブリキ缶などに差し色として赤い色が用いられていますが、くすんだ茶褐色の色調が全体を覆い、禁欲的な印象も与えます。

また、「飯場の風景」（一九六三年）では、中央に配されたストーブと煙突が藍色を帯びていますが、やはり茶褐色と灰白色で人物や板の間を塗り、抑制された画面からは労働の厳しさが感じられます。

「馬」（一九六五年）は、黒々とした体毛をペインティングナイフで丹念に描いた跡があり、その細部に至るまでの執拗な描写が眼を引きます。

これら初期作品群を通して、戦後の開拓農民として生きた日勝の生活や生きざま、そして大地の色を思わせる色彩の特質を紹介しました。

「神田日勝の造形～キュビスムを手がかりに」（後期常設展）

十二月四日～四月二十七日

「家」1962年頃

神田日勝には、一九六二年頃制作した「家」と題する作品が二点残されています。

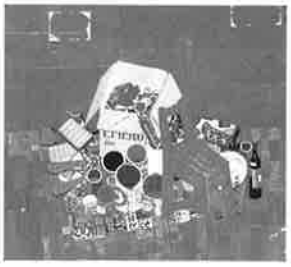
人物と家、そしてドラム缶などを配する構図には、キュビスムの影響が強く感じられます。

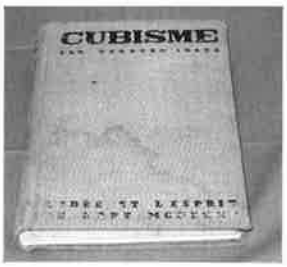
キュビスムは「立体派」と訳され、ピカソとブラックが一九〇七年頃から共同で取り組んだ芸術様式を指す言葉です。キュビスムは、セザンヌの「自然を円柱、円錐、球としてとらえる」という思想を土台に、多視点や分割、コラージュなどが特徴です。また、キュビスムは二十世紀のさまざまな芸術運動に影響を与えました。

日本では岡本太郎や伊原宇三郎、池田満寿夫など、その影響を受けた画家は少なくありません。

神田日勝の作品にも、このキュビスムの手法を取り入れた作品があります。

「静物」1966年


「画室C」1967年



神田日勝の蔵書「CUBISME」伊原宇三郎 著

「家」（一九六二年頃）では椅子や絵の具缶が多視点で描かれており、一見すると写実的と思われるものでも、よく見ると微妙にゆがんだ構成であることに気がつきます。

また、「画室」のシリーズでは椅子や絵の具缶が多視点で描かれており、一見すると写実的と思われるものでも、よく見ると微妙にゆがんだ構成であることに気がつきます。

このように、神田日勝の作品は、細部まで克明に描いていながら、全体としてはキュビスム的な手法を取り入れており、画面には空間表現としての奥行きよりもそれぞれのものが貼り付けられたような不思議な実在感があり、このような造形上の効果もあって、見る者に迫ってくるような強い印象を与えているようです。

平成十九年度特別企画展

「絵の具だ！バンザイ！」

十一月六日～十二月二日
神田日勝記念美術館

「晴れた日の風景」1968年

「人と牛D」1968年

神田日勝の厚塗りの作品群を軸に具象抽象を問わず、絵の具を厚塗りした作品に着目した特別企画展。

日勝が「赤い魚」を制作したとき「絵ってこんなに楽しいんだな」と語ったというエピソードから表題を得ました。

このような作品が制作された時代的な要因としては、アンフォルメルの影響が考えられます。これは一九四六年にパリで開催されたデュビュッフェの個展に序文を書いた美術評論家、ミッシェル・タピエに端を発した運動で、日本には一九五六年に東京で開催された「世界・今日の美術展」からアンフォルメル旋風が吹き荒れました。

北海道には一九六〇年頃からこの運動を含めた前衛的な芸術の情報が流れ込んできたそうです。

本展では、一九六八年に集中的に描かれた日勝の厚塗りの作品群とともに、菊地精一や田中忠雄、福井正治など具象系の作家と、藤本俊子、小野州一、鎌田俳捺子など非具象から抽象系の作家、さらに日勝の兄、神田一明や独自の表現から立体表現へと進めた楢原武正の作品を展示して、作家それぞれの造形的な手法や内的心情、そしてこの表現の特徴や時代性などもからめながら、紹介しました。

亀山良雄「闘い」1959年

楢原武正「子供」1976年

小野州一「婦人像」1966年

亀山良雄の「闘い」は具象から抽象的志向を強めていく過渡期に描かれた作品。楢原武正の「子供」は厚く盛り上がるような絵の具の塊が輝くような生命感を感じさせます。小野州一の「婦人像」では軽快な描線がパリの華やかな雰囲気を漂わせ、鎌田俳捺子の「流れる」は暗褐色の溶岩のようなマチエールがイメージの広がりを想起させています。神田一明の「赤い室内C」は流動的な描線がアンフォルメルの自由でスピード感ある表現の影響を感じさせます。

神田日勝の厚塗り表現はそれまでの緻密な克明描写から飛躍したように見えますが、馬や牛をモチーフにしたものから、家族や男女など人間の生を明るい青や赤、ピンクや緑などの原色を用いて表現主義風に描いているようです。また、独立展に出品を重ねるに従い、自分の画家としての方向性を改めて考える契機にもなったのかもしれません。その意味で、この時期の作品は彼にとって色彩や表現方法など造形的な可能性を追求した一つの表れといえるのではないでしょうか。

神田一明「赤い室内C」1966年

関連事業 親子ワークショップ

「絵の具であ・そ・ぼ！」

十一月二十三日 鹿追町民ホール

札幌在住の美術家、カワシマトモエ氏を講師に、絵の具を使う楽しさや面白さを体感してもらう企画に、幼児と親三十六名が参加しました。

最初に、特別企画展で神田日勝の絵の具を盛り上げた作品や他の作家の作品を鑑賞。製作会場の工作室では、色とりどりの絵の具を段ボールパレットに盛り、好きな色を自由に着彩。画材も講師によると日勝がベニヤにペインティングナイフで描いていることに着目したということで、割りばしなどで描く方法を思いついたそうです。

完成作品は、十一月三十日まで町民ホールロビーに展示されました。

神田日勝作品紹介（Ⅰ）

二〇〇七年四月、三十回に渡り朝日新聞の「北の美術」に掲載された作品解説の中から、選抜して紹介します。なお、掲載作品は、神田日勝記念美術館所蔵または受託作品です。

（協力・朝日新聞北海道支社）

「馬（絶筆）」1970年

ベニヤ板に描かれた半身の馬は未完だ。画家の死後、公開された。毛の一本一本、農耕馬に特有の胴引きの跡まで克明に描かれている。絵の前で涙する来館者に出会う。馬の存在感やぬくもりを強く感じるからか。東京から戦時疎開で鹿追へ。農民となり、画家をめざし三十二歳で早世した神田日勝。四月はその魅力を菅訓章と釜沢恵子が紹介します。

四月一日（K）

「自画像」1956年頃

兄一明の影響で油絵の魅力に触れ、油彩画を描き始めた最初期の代表作品。成人前の日勝の真剣な表情が描かれている。この時期の作品がほとんど残っていないことを考えると、思い出の作品として大切に保管されていたのだろう。

当時中学生だったミサ子夫人は、町の文化祭でこの作品に出会い、その迫真力に強烈な印象を受けた。

四月二日（S）

「風景」1956年頃

神田家の住宅や畑の全景を描いた作品。実際の生活空間を描くのは、風景画としては珍しい。畑には馬草と推測される作物の塊が描かれ、右側には小柏の林が広がる。畑の中にも樹木が描かれ、この畑が開墾の途中であることがわかる。住宅を中央にして右側には鶏舎、左側には馬小屋が描かれ、さくは隣家との境界。

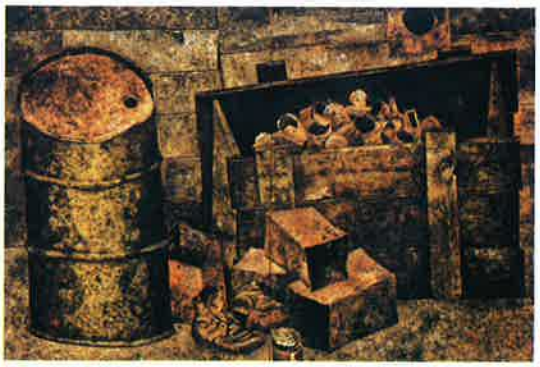
結婚当初の風景と、夫人は回想する。

四月三日（S）

「家」1960年

道内を車で走っていると、朽ち果てた廃屋を目にすることがある。かつて、北海道の原野を切り開いた開拓者の痕跡。薄い板壁の中で雨風をしのぎ、風雪に耐えた。日勝が暮らした家は、一度火災に遭い、建て直した。防風林の跡地を馬と抜根した彼も開拓農民だ。身の回りのものを克明に描くことから始め、この作品は全道展に出品、初入選した。

四月四日（K）



「ゴミ箱」1961年

昭和三十年代、ドラム缶やブリキ缶などは穴が開き、さびるまで使われていた。

日勝は身の回りのありふれたものに目を向けた。そこには生活者としての視線と実感がこもっている。ベニヤ板にペインティングナイフで描く独自のスタイルも、この頃には定着した。

全体に茶褐色の絵の具で描かれた画面からは、土のにおいを感じる。

四月五日（K）

「板・足・頭のための習作」1963年頃

没後の独立展で詩人の宗左近は日勝の画業に高い評価を与えた。当時宗と親交のあった岡田武昌は帯広の画友の協力を得て、自ら携わる東京日本橋の柳屋画廊で遺作展を開催した。その時遺族より岡田に贈られた作品がこの習作。日勝の初期の人物像の特徴が表現され、板塀の木肌が克明に描かれている。

四月七日（S）

「飯場の風景」1963年

鹿追では農閑期の冬、山奥の小屋で寝泊まりしながら、造林や製材の仕事をした人が多くいたという。「飯場」という言葉は現在では死語となった。

ストーブの周りで暖をとり、眠りをむさぼる二人の男。手足はごつごつと太い。この沈黙の画面からは、生きることの尊厳のようなものが伝わってくる。

四月八日(K)

「牛」1964年

モノクローム調から色彩を用い始めた転機をなす作品。牛の穏やかな表情とともに、切り裂かれた腹部の赤とバケツの青と白が鮮烈に描かれている。当時日勝は雑誌「太陽」の古墳特集で石の質感に興味を抱いたという。作品中の石床の表現には筵(むしろ)とともに強いこだわりをうかがわせる。生活を共有した牛への哀悼とともに、古墳玄室の雰囲気が漂う。

四月九日(S)

「開拓の馬」1966年

義父高野長吉は、長年務めた北鹿追神社の氏子総代の退任記念に何か残そうと思いたち、当時日勝が然別湖のホテルのために制作した「静物」をヒントに油絵を描くよう依頼した。指定は特になかったが、馬が題材となり、秋に絵馬として社殿に奉納された。日勝には絵の具代五千円が支払われた。「馬」や「死馬」など克明描写の作品群に連なる作品だ。

四月十日(S)

「静物」1966年

筵(むしろ)に広げられた野菜や果物。ありふれたものを描きながら、不思議な違和感を覚えるのは、影がなく逆遠近法でとらえているからか。

帯広の製菓工場に昔勤めていた人が、「ほら、あそこの段ボール。なつかしいな」と絵の前でつぶやいた。

思い出と想像力が膨らむ、そんな力を日勝の絵は持っている。

四月十一日(K)

「ヘイと人」1969年

「人と牛」の連作などと並行して制作された後期克明描写期の作品。薬・車の広告が氾濫(はんらん)する新聞、媚態(びたい)を晒(さら)す女性像とベトナム戦争を想起させるポスターが張られた塀。背後に佇(たたず)む人。「板・足・頭」をほうふつとさせながら、そこに描かれるのはコマーシャリズム社会の断面。「真に主体性のある生き方をすることはきわめて難しい時代」と日勝は語っている。

四月十二日(S)

「家」1962年

夫人の叔父高野保昌は夫妻の仲人で、日勝作品を親しい人たちの結婚記念などに贈った。「家」は保昌翁が大切にしていた。翁はこの廃屋に終戦後の引き揚げ開拓農家の典型を見いだす。ビートを馬車で運ぶ枠板、古靴片方、空箱を利用した馬のエサ箱に深い感慨を覚えた。右隅に描かれた赤い自転車は日勝の父要一が入植当時生活の糧にしていた郵便配達を連想させる。

四月十三日(S)

第十三回馬の絵作品展

十月二日～十月十日
鹿追町民ホール

文部科学大臣賞　小樽市立幸小学校5年
小川　舞

北海道知事賞
釧路町立遠矢中学校2年　望月　陽子

北海道教育委員会教育長賞
江差町立江差小学校2年　高田　若菜

今年の応募総数は、一三一四点で小学一年と中学生の出品が多く、応募作品のレベルも全体的に高くなっているようです。

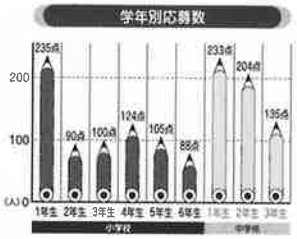
文部科学大臣賞の小樽市立幸小学校五年の小川舞さんの作品は、馬の身体を直線が交差する構図でとらえ、卓越した表現力がうかがえる力作で、この他に入賞十三点、入選三十二点、佳作四十九点が選出されました。

道外からは、青森県と茨城県からの応募が百点を超え、遠く鹿児島県や宮崎県からも郷土色あふれる作品が寄せられました。

なお、初山別村と釧路町にも入賞・入選の作品が巡回しました。

表彰式

十月六日　鹿追町民ホール



文部科学大臣賞の賞状を受け取る
小川舞さん

函館市や江差町からの受賞者を含め、入賞者十三名のうち十名の参加があり、関心の高さをうかがわせました。

表彰式では齊藤隆博審査委員長の講評や吉田弘志鹿追町長の祝辞、後援団体の紹介も行われました。その後、会場で家族とともに記念撮影をしたり、神田日勝の作品に魅入っている姿も見られました。

第13回馬の絵作品展入賞者

○文部科学大臣賞
小樽市立幸小学校５年　小川　舞
○北海道知事賞
釧路町立遠矢中学校２年　望月 陽子
○北海道教育委員会教育長賞
江差町立江差小学校２年　高田 若菜
○鹿追町長賞
鹿追町立鹿追中学校１年　木幡 有紗
○鹿追町教育委員会教育長賞
霧島市立高千穂小学校１年　勝久 幸太
○神田日勝記念美術館長賞
小樽市立桜町中学校３年　常見 菜月
○北海道新聞社賞
旭川市立愛宕東小学校６年　藤田 大地
○十勝造形サークル委員長賞
鹿追町立鹿追小学校３年　東原 由佳
○帯広市教育研究会図工美術部会長賞
芽室町立上美生小学校１年　伊藤 羽佳
○JR北海道社長賞
羽幌町立羽幌小学校５年　梅原 誉生
○北海道電力帯広支店長賞
森町立森小学校４年　工藤 夏実
○帯広信用金庫理事長賞
浦河町立浦河第二中学校１年　阿部 一真
○ホテル福原社長賞
羽幌町立羽幌中学校２年　山口 みのり

馬の絵写生会

八月三日　ライディング・パーク

雨天の中で、馬を見学

ウリマックホールでの製作

小学生二十七名、中学生一名計二十八名が参加。雨天のため、柵の周りから馬を見学したりしたあと、ウリマックホールで馬の絵を描きました。

脇坂裕・眞鍋幸恵両講師から、馬の身体のとらえ方や身体の特徴、絵の具の混ぜ方や筆の使い方など一人一人ていねいなアドバイスを受けながら製作に打ち込みました。

馬の色を工夫したり、周りの草や柵を描くなど、思い思いに趣向を凝らし取り組みました。

鹿追高校生がボランティア活動

鹿追高校ボランティア同好会の皆さん

平成十八年から開始された鹿追高校ボランティア同好会のメンバーによるボランティア。

今年は四名が紙額を作成したり、印刷物の発送など馬の絵作品展の準備作業を手伝いました。馬の絵作品展の陰でこうした協力が展覧会を支えています。

第十三回蕪墾祭

六月十七日　神田日勝記念美術館・鹿追町民ホール

いろりっこの会によるコンサート

交流会会場

二月に逝去された高橋揆一郎前館長への追悼の意を込めて、前館長が会長をつとめた「いろりっこの会」による童謡や唱歌のコンサートが行われました。

沼田順子氏の独唱による「月の沙漠」や「千の風になって」の他、合唱では「赤い靴」「夕焼け小焼け」など郷愁をそそる十八曲が演奏されました。ピアノ伴奏は藤井裕代氏。

約一五〇名の日勝や合唱の愛好家が集まり、懐かしいメロディーに唱和する姿も見受けられました。

演奏後、町民ホールを会場に恒例のワインとチーズの交流会を開催、アンコール演奏を含めて場内で参加者の温かな交歓風景が展開されました。

また、同時期に開催中の十勝管内水彩作家展「水への誘い」の出品者も参加して水彩連盟の大原裕行氏による作品批評会も行われました。

第十五回馬耕忌

八月二十日　鹿追町民ホール

菅副館長、中野氏、武田事務局長（左から）

挨拶する蔡國華氏

本年は、美術評論家、中野中（あたる）氏による「日勝と自画像」と題する講演を中心とした企画で行われました。

中野氏は、かつて独立展の会場で神田日勝の「室内風景」に接してその異才を見抜き、詩人の宗左近に紹介した機縁があり、神田日勝の自画像については二点あること、作品の中に作者が登場するものも複数あると指摘し、「室内風景」については中心に描かれた男の不安そうな内的心情や高度成長期の時代背景が反映された自画像的な作品であると述べました。

続いて、武田耕次神田日勝記念美術館友の会事務局長と菅訓章副館長によるアートディスカッションが行われました。

また、「人を描くⅢ」の出品作家の水上泰財、波田浩司、川畑盛邦、蔡國華氏が壇上に上がり、自己紹介と神田日勝作品に対する感想などを述べました。

この他、恒例の田中光俊氏のギター演奏も行われました。

交流会は「人を描くⅢ」を会場に作家を交えて行われました。

第五回日勝祭

「恋するトマト」上映に併せ館長が対談

十二月八日　鹿追町民ホール

大地氏と小檜山館長（左から）

小檜山館長が原作を書き、俳優の大地康雄氏が企画・主演・脚本を手がけた映画「恋するトマト」の上映会に併せ、両氏による対談が日勝祭として開催されました。

対談では、大地氏による原作依頼の逸話や、二人のフィリピンでの取材旅行の苦労話やエピソードなどが披露されました。大地氏は映画制作にあたって農家に住み込み農業を一から学んだことや、そこでの人間的な触れ合い、そして食べ物を生産する職業の重要性を実感したことなどを、小檜山館長は、農業という職業の素晴らしさや日本の食糧自給率の低さなどに言及し、問題提起をしました。

窪島誠一郎氏による美術講座「夭折」

五月十五日　鹿追町民ホール

長野県で夭折（ようせつ＝若くして亡くなること）画家の素描を展示する「信濃デッサン館」と戦没画学生慰霊美術館「無言館」の館主で「馬耕忌」の命名者でもある窪島誠一郎氏による美術講座が開かれました。

窪島氏は村山槐多や野田英夫、神田日勝など夭折画家の生涯を紹介し、夭折の画家たちは課せられた人生の中で、芸術家として人生を全うしていると語ってくれました。

神田日勝作品紹介(Ⅱ)

「静物」1969年頃

むきかけのりんごやみかんが並び、鳥が逆さに吊(つる)されている。決して美しいとはいえないが、果物の皮や木の台の質感がとてもリアルに表現されている。

質感へのこだわりは日勝の大きな特徴だ。ペインティングナイフでベニヤに刻み込むように描く技術は、独自の探求から生まれたものだ。

四月十四日(K)

「荒野の廃家」1965年頃

独立展入選によりNHKの農村番組の取材を受けた日勝は、担当ディレクターに個展会場の紹介を依頼。こうして喫茶「珈琲園」を会場に帯広での初個展が実現した。この作品はお礼として店主より紹介者に贈られた。この時期としては荒々しいタッチで、荒漠と光景の中に廃家を描いた珍しい風景画だ。画集発刊を機に埼玉県の所有者より里帰りした。

四月十五日(S)

「風景」1966年頃

十勝の農村では見慣れた風景だ。豆のにお積みらしきものが点々と続いている。今でも、地平線のかなたに広がる、この地方の晩秋の一コマだ。

日勝は大作では遠近法にとらわれない構図で描く一方、小品では十勝の風景を写実的に描いている。このことは、画家として生きていく上で、バランスをとっているようにも見える。

四月十六日(K)

「画室A」1966年

この年の独立展を契機に色彩を画面全面に広げた「画室」の連作が始まる。室内には純色がふんだんに取り入れられた絵の具缶。実生活ではアトリエは存在せず、絵筆があることから、画友の画室に想を得たとも思われる。鋏(はさみ)、バスタオル、手製の額など実際の生活で使用されたものも描かれ、「和麺」「EMERON」など箱の表記に農村生活の痕跡をしのばせる。

四月十七日(S)

「画室C」1967年

床と壁が鮮やかな赤からピンクのトーンになり、画室シリーズは構図が整理されていく。コマーシャリズムや大衆文化はポップアートの重要な要素だが、日勝も時代とは無縁ではなかった。絵の具缶の下の敷物には広告文字がコラージュのように氾濫(はんらん)している。

この後、日勝は自己の存在を重要なテーマとして展開していく。

四月十九日(K)

「晴れた日の風景」1968年

馬も人も太陽に向かい全身で喜びを表現している。輝く太陽が歓喜の象徴だ。原色の絵の具をたたきつけるように激しい筆触で描き、画風が一変したように見える。

アンフォルメル旋風が美術界を席巻し、多くの画家が抽象に転向していった。具象に踏みとどまった日勝は、表現の可能性を模索する。

四月二十日(K)

「人と牛C」1968年

厚塗りでダイナミックな「人と牛」は、改良された左官ゴテを使用して四作品が制作された。母親が通院して妹宅に身を寄せた時期、晴天でも二階の和室に防水テントを張って制作に没頭した。窓が赤い状態を見て驚いて帰宅した夫人に、日勝ははにかんだ顔で「ごめんね」と言ったという。多量の絵の具が手に入るようになり、農作業を忘れて画業に没頭した時期の逸話だ。

四月二十一日(S)

「作品C」1969年

神田一家を描いた作品。ビンとコップが乗る飯台を囲み、夫人・長男、画家自身が描かれ、背後にストーブが配されている。このことは同種の具象作品があることから裏打ちされよう。展覧会の出品歴は現在のところ不分明だが、画友であったNHK帯広放送局の山口明雄に作品を引き上げた帰路預けたという話から、管内の展覧会で公開されたものと思われる。

四月二十二日(S)

「人間A」1969年

堅く抱き合う男女。背後の赤い帯のような渦は、二人の情熱なのだろうか。日勝はクリムトの「抱擁」を画集で見ていたかもしれない。しかし、この厚塗り表現は長続きしなかった。彼はやがて、初期の克明描写へと回帰していく。

画家としての岐路に立ち、迷いの中から再出発をめざした彼には、しかし、もう時間はあまり残されてはいなかった。

四月二十三日(K)

「静物・家(未完)」1970年

「馬(絶筆)」を仕上げるための素描で、さまざまなポーズの馬を描き、家や机、魚などを組み合わせている。この作品もそうした習作の一つだろう。全体を同じ調子で描くのではなく、部分を細部から仕上げていく。パズルのように余白を想像すると、画家の創造の秘密に触れることができるかもしれない。

四月二十五日(K)

「馬」1965年

日勝は生涯に渡って馬を描き続けた。馬は彼にとってかけがえのない存在だった。馬具をつけた馬ではなく、裸馬を描く。彼は馬の死にも遭遇している。その生と死が彼の画の中で交錯する。

ベニヤ板にペインティングナイフで刻み込むように描かれている馬の姿は、彼の手によって永遠の魂を得たかのように存在し続ける。

四月二十八日(K)

「室内風景(素描)」1970年頃

日勝は油彩の「室内風景」のために何枚か下絵を描いている。ミサ子夫人もズボンをはいてしゃがみ、モデルになった。何を考えているのか、その表情からは窺(うかが)い知れない。現代に生きる私たちの孤独と苦悩を見通しているかのようだ。

四月三十日(K)

(S)は菅訓章、(K)は釜沢恵子が執筆

朝日新聞「北の美術」四月の紙面より転載

「十勝管内水彩作家展・水への誘い」

六月十六日～六月二十四日　鹿追町民ホール

十勝管内の水彩画家三十一名の作品による第二回「水への誘い」展が蕪墾祭に併せ開催されました。

企画協力の瀧川秀敏氏や遠藤直子氏を始めとする作家で、全体的にレベルが高く、タウシュベツなど四季折々の十勝の自然や、シャクヤクやナナカマドの木々や花々などが色彩豊かに描かれていました。

この展覧会には水彩画のサークルや愛好家などが来場、その繊細で透明感ある作品に魅入っていました。

「美の棲む処―ten展」

四月二十八日～五月六日　鹿追町民ホール

清水町出身の富谷智氏を始め北海道出身の小笠原緑氏、中野渡みね子氏など十一名の作家グループによる絵画、彫刻、インスタレーションなどの展覧会。

作品は、絵画では抽象、具象などさまざまな傾向を見せ、立体作品では木や金属、布などのオブジェがあり、現代の作家の意気込みが感じられます。企画にあたる美術評論家、中野中氏は「悩み、とまどい、闘うところにのみ美はうまれる。」と述べています。

「北の貌―佐藤雅英写真展」

四月二十四日～五月六日　神田日勝記念美術館

故高橋揆一郎前館長のポートレート

北海道の芸術家や文化人のポートレートや道内の建築物などを取り上げ、高く評価されている写真家、佐藤雅英氏の『北の貌』から選抜した写真展。

追悼展の意味を含めた故高橋揆一郎前館長をはじめ、小檜山博館長、三浦綾子夫妻など北海道の文化を彩る人物像で構成されており、モノクロの画面からは強い個性が感じられます。

「信仰」と「芸術」展

八月四日～八月十六日　鹿追町民ホール

信濃デッサン館と沖縄の佐喜眞美術館の所蔵作品から窪島誠一郎氏が監修。ジョルジュ・ルオー、ケーテ・コルビッツ、舟越保武など七名の素描、ブロンズ、版画、油彩など約六〇点余による構成で深い宗教性が感じられる展覧会となりました。（この企画は東京、長野、沖縄に巡回）

「人を描くⅢ」

八月十八日～八月二十六日　鹿追町民ホール

国際的に活躍する上海市出身の蔡國華氏を始め、武蔵野美術大学の水上泰財氏、道内在住で独立展に出品している高橋正敏氏や波田浩司氏、道展のベテランの川畑盛邦氏の五名による二十二点が展示されました。

気鋭の作家たちの強い個性を放つ作品群は来場者に強いインパクトを与えていました。

「野村たかあき絵本原画展」

十二月四日～十二月十六日　神田日勝記念美術館

群馬県前橋市在住の絵本作家、野村たかあき氏の、第十三回絵本にっぽん賞受賞作「おじいちゃんのまち」と、落語に題材を得た「しにがみさん」の絵本原画、計三十六点が展示されました。

なお、野村氏は幼稚園や保育園等を訪れ、自作の読み聞かせを幼児・児童に披露しました。

感想ノートより―㉒

千葉から来ました。何の先入観もなく来館し、とても感動しました。どの絵も（同一人物と思えない異なる表現）強いしょうげきでした。帰ってから日勝について勉強してみます。

2007.4.4　K.G

北海道を周遊しながらこちらへ足が向かっていました。
思えば神田日勝青年の夭折が惜しまれます。
未完の馬はきっと才ある画家とともに天には召されなかったのでしょう。
ここ、この地において未だ飛翔の時機を耐えて待っているかのように思われました。日勝の分身でありましょう。少年、日勝のたくましい眼が大自然と出会えたことにしても、大いなる力の存在が感じられてなりません。
私も、やはり生きていこう。

6.24　東京都　A.K.

北海道は開拓精神のみなぎった大地があちこちで胸を打つ。そして今日も又、この館で私は感動して涙しました。
日勝さんの絵も素晴らしい。元気が出ます。人生を大切にしなければと思います。知らず訪れたこの美術館を私は忘れられない。建物も圧倒されました。又きっと訪れてみたい。

7.15　愛知県　N.T

神田日勝のことは以前TVで取り上げられ初めて知りました。隣りの町出身の私は全く存在を知らなかったのです。今回、願いがかない、実家へ帰省した折寄せていただきました。
感動、感動、その次にじわーっと涙が出る。そんな作品でした。

9.16　仙台市　F

北鹿追に生まれ北鹿追に育ち、そして15才で故郷を離れました。その9年後父母も離農し、北鹿追を離れました。中学を卒業して43年余り。
本日は中学の同窓会が然別湖で開かれるため、その途中本館に立ち寄りました。千葉に住んでいて神田日勝記念美術館の存在を知り、いつかは来たいと思い、やっと念願がかないました。貧しい同じ時代を生きた者として非常に共感を覚えます。作品の中の「離農」は胸をしめつけられる思いで見ました。

11.24　T.H

新刊紹介

「北のコンチェルト」

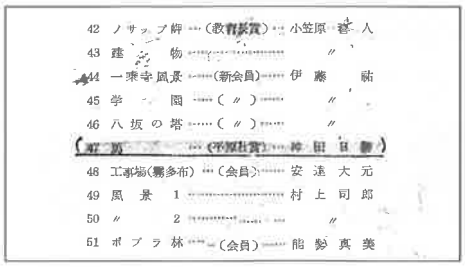
「日本全国ユニーク個人美術館」

芸術家生誕の地などにある個人美術館を紹介した「日本全国ユニーク個人美術館」（東日本編、西日本編の二巻）の東日本編で、北海道五館の中に、神田日勝記念美術館も紹介されています。
また、美術評論家、柴橋伴夫著の「北のコンチェルト」では、二十七人の画家が紹介されていますが、その中で十勝の風土性をからめ、神田日勝の芸術について詳細に論じています。

神田日勝の「風景」札幌で公開

米山正治氏（神田日勝記念美術館初代館長）により神田日勝の一九六八年に制作されたものと鑑定された「風景」が、札幌市内で開催された「絵画バザール」に展示され、注目を集めました。
初夏の十勝の農場で草を食べる牛が点在する緑色が鮮やかな風景画で、秋から冬にかけての風景が多い日勝にしては珍しい作品です。

平原社美術展の目録寄贈


42　ノサップ岬……（教育長賞）……小笠原　巷　人
43　建　物……〃
44　一寒々風景……（新会員）……伊　藤　祐
45　学　園……（〃）……〃
46　八坂の塔……（〃）……〃
（平原社賞）……神田日勝
48　工場（鶴多布）……（会員）……安　達　大　元
49　風　景　1……村上司郎
50　〃　2……〃
51　ポプラ林……（会員）……能勢真美

平原社美術展目録の複写（部分）

神田日勝が一九五七年に平原社美術展で平原社賞を受賞したことが記載されたパンフレットが寄贈されました。
「森田親之・加地保良絵画展」の際に加地氏が保存していることが判明したもので、美術館で探していた資料のひとつです。一九五六年から五八年までは「平原社」の年表では空白とされていたため貴重な発見となりました。

アート・キッズ・クラブ二〇〇七

五月十九日～翌年二月二十三日
鹿追町民ホール

神田日勝絵がるた

週末活用の一貫として開始されたアート・キッズ・クラブも五年目。
今年は美術館での神田日勝の絵がるたによる絵合わせを含め、八回のプログラムが組まれました。
そのうち四回がペットボトルやテッシュ箱などを活用したリサイクル工作で、厚紙を組み立てたペーパークラフトや神田日勝作品にお話をつける回もあり、延べ三十三名の児童が参加しました。
また、鹿追高校ボランティア同好会を始めとするキッズ・ボランティアも毎回参加し、子どもたちの補助をしてくれました。

夏休み子どもワークショップ

「木登り人形を作ろう！」

八月九日　鹿追町民ホール

桂材の板による木登り人形の製作に小学生十二名が取り組みました。

二頭のゴリラとバナナの形に切ってある板材に紙ヤスリをかけて、アクリル絵の具で好きな色を塗りました。

たこ糸を通して引っ張ると、するする登るからくりを楽しみました。

冬休み子どもワークショップ

「ネズミの貯金箱を作ろう！」

一月十一日　鹿追町民ホール

粘土を型取りした干支のネズミの貯金箱製作に、小学生九名が挑戦。

陶芸工作館職員が粘土の表面に模様をつける方法を説明したあと、ネズミのひげや表情を思い思いに工夫しました。

成型した作品は、後日素焼きを経て、参加者に渡されました。

冬休み子どもワークショップ

「和紙のランプシェードを作ろう！」

三月二十六日　鹿追町民ホール

和紙を竹ひごや針金の枠に貼るランプシェード製作に小学生十二名が取り組みました。

四枚の和紙を糊で貼り合わせるのに苦労しましたが、照明を点灯すると本格的な作品のできばえに歓声をあげる人もいました。

キッズ・ボランティアの活動

アート・キッズ・クラブなどの活動の補助として、キッズ・ボランティアに今年は鹿追高校ボランティア同好会の生徒五名と一般一名が登録しました。低学年が多く、作業に手間取る児童がいましたが、厚紙を切ったり、接着剤で貼る際に、キッズ・ボランティアが熱心に手助けしてくれ、作業もスムーズに進むようになりました。

芸術鑑賞バスツアー

十月二十一日　北海道立近代美術館
北海道立三岸好太郎美術館

札幌の北海道立近代美術館の「日本美術ノ光華」「ガラス工芸」展、北海道立三岸好太郎美術館の「ジョルジュ・ルオーと三岸好太郎」展を巡るツアーに十七名が参加。

特に「日本美術ノ光華」では大倉集古館のコレクションから選ばれた「国宝・古今和歌序」や横山大観などの名品を鑑賞しました。

子ども芸術鑑賞ツアー

十二月一日　北海道立帯広美術館

北海道立帯広美術館の「オランダ絵本作家展」と「コレクション・ギャラリー「アートな動物園」を鑑賞。小学生四名、保護者二名、幼児一名の計七名が参加。

ディック・ブルーナの「ミッフィー」を始め楽しい絵本原画の数々を鑑賞し、塗り絵にも挑戦しました。

柳月製菓の「Ｎｉｓｓｈｏ」再発売

「神田日勝と鹿追町をＰＲするためのお菓子」として柳月が販売を開始した焼き菓子「Ｎｉｓｓｈｏ」。

「馬（絶筆）」をあしらったクッキーとして、「黄昏の農場」（素描）や小檜山館長の推薦文の入った化粧箱入りで、平成十九年八月十日より、販売を再開しました。

神田日勝のコーナーも――「アート・コレクション福原記念館」開館

七月二十八日

神田日勝「静物」1966年

福原記念館

スーパー「福原」創業者で、名誉会長の福原治平氏が私財を投じた「アートコレクション福原記念館」が平成十九年七月二十八日に鹿追の市街地に開館しました。

展示室には、内外の油彩・日本画・彫刻などの名品を集めたコーナーも設けられている他、福原氏が依頼して描かせた日勝作品のコーナーが眼をひきます。

然別湖にちなんだ動植物をモチーフにした「静物」をはじめ、「赤い魚」や「扇ケ原」などの作品世界が記念美術館の別の魅力を伝えています。